

期 昭和五七年一月六日〜二三日
於 図書館三階閲覧室（本館）

徒然草 — 古活字・版本・奈良絵本 —

徒然草は、吉田兼好の随筆として名高い。名称のおこりは、巻頭の「つれづれなるまゝに日ぐらし硯にむかひて：」とあるのによるといわれる。西尾実氏の解説には、「三条西実枝の崑玉集によると、兼好の没後、かって彼が住んでいた京都吉田の感神院の壁に貼られてあった反古や、写経の裏に書きつけられていたものを、今川了俊と兼好の侍者であった命松丸とが「とりそろえて」、草子二冊にしたもので、つれづれ草という書名も了俊によってつけられたということである。」とある。（日本古典文学大系所載）

(1) つれづれ草

（常磐松文庫）

奈良絵本 三冊（上・中・下） 半紙判 一〇行書き 綴帖装 「寛文頃」筆
箱題箋に「住吉具慶絵」とある。虫損がはなはだしい。
奈良絵としては、色調がおだやかで、精緻な筆づかいの一品である。

(2) 徒然草

（黒川文庫）

活字本 二冊（上・下） 美濃判 一二行書き 無刊記

上巻に朱書き入れがある。

活字本とは、一字ずつ彫刻または鑄造された文字を組み合わせて版を作り、この組版に墨またはインクを塗って印刷した本である。特に古活字版といわれるものは、文禄から慶安まで出版された活字版で、慶長・元和古活字版が有名である。

(3) 徒然草

（黒川文庫）

版本 一冊 美濃判 一一行書き 無刊記（元和・寛永頃）

版本は、字または絵図を一枚の板木に逆文字などで彫り込んで、その面に墨を塗って、その上に用紙をあてて、刷りあげてまとめた本で、活字版との差異は、一文字ずつの活字を組み合わせたものでなく、板木一面に彫り込むもので、現存する板木としては、温故学会にある「群書類従」が有名である。

(4) つれづれ草

（常磐松文庫）

版本 二冊 美濃判 絵入 一四行書き 元文五年（西暦一七四〇年） 書林鼎直堂
刊 角書「新版絵入」

時代がくんだり、徒然草も流布したであろうことを感じさせる。前者の二つの刊本と比較し、絵入、ふり仮名つきで、版も粗末になっっている。

以上、(2)、(3)、(4)の江戸期の版本を、時代順にみてゆくと、活字本から板木本へ、さらに時代がさがると、大衆むけに、行間も狭い、こぶりな版本へと移行してゆく姿がみられるのである。